



虹のかけ橋

第44号/令和2年9月

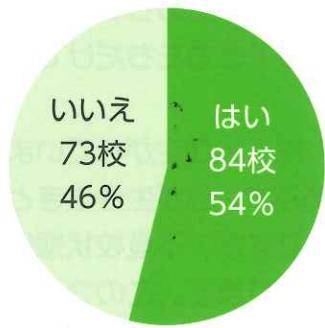
兵庫県立但馬やまびこの郷 <http://www.t-yamabiko.asago.hyogo.jp/>

子どもの適応感を把握して、支援につなぐ

新型コロナウイルス感染症対策による長期休業後、学校が再開されてしましました。

感染予防対策を行いつつ、子どもたちと心ふれあう学校・学級づくりをするのは大変難しいと実感されていることでしょう。今回は、「学校における『不登校の未然防止』についての調査研究事業報告書」において紹介しています「不登校の未然防止に係わる取組についてのアンケート調査」とともに、不登校の未然防止の重要性を再確認したいと考えます。

学級への適応感調査をしていますか



※ %は小数点以下四捨五入

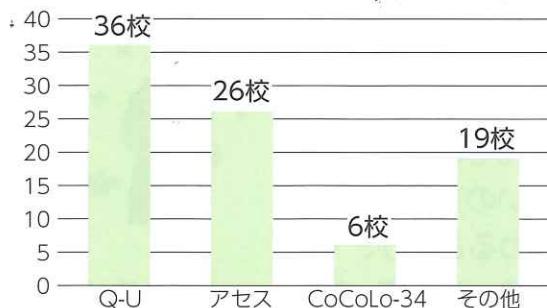
調査校に生徒の学級への適応感について調査をしているかどうかを尋ねたところ、「行っている」と回答した学校が54%で半数を超えていました。

日々の観察や日記、個別相談などと合わせて生徒を理解するとともに、客観的に子どもたちの学級への適応感を把握するには大切なことです。

そして、さらにその結果を教職員間で共有し、どのように活用するのかが重要です。

調査の方法

「はい」の場合は何を行っていますか(複数回答可)



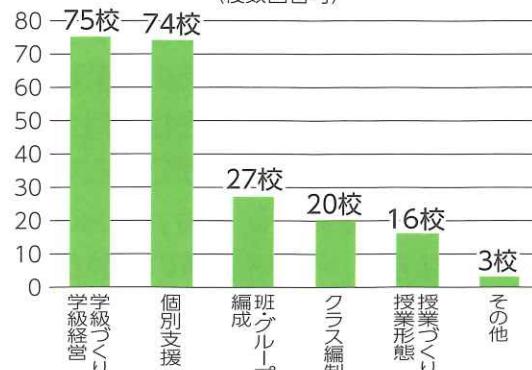
※1 楽しい学校生活を送るためにアンケート Q-U

※2 学校環境適応尺度「アセス」

※3 いじめ未然防止プログラムに活用するためのアンケート

調査結果の活用

「はい」の場合、調査結果をどのように活用していますか(複数回答可)



「はい」と答えた学校ではQ-Uやアセスの利用が多く、調査結果は「学級づくり・学級経営」「個別支援」に多く活用されていますが、「授業づくり・授業形態」を考えるもとにもなっています。調査結果と日々の行動観察等とを併用しながら子ども理解に努め、ソーシャルディスタンスは保つても、心の距離は近くにありたいものです。

調査対象:兵庫県内の平成30年度不登校担当教員加配及び生徒指導教員加配校の中学校等(該当校193校のうち回答校157校)

調査時期:平成30年9月~10月

これからの不登校支援のあり方 ～心の扉を開けるマスターキーは…～

8月11日に行われた「不登校に関する研修会」において、「これからの不登校支援のあり方～全ての子どもを支えるソーシャル・ボンドについて考える～」をテーマに、前兵庫教育大学大学院学校教育研究科特任教授 池島徳大先生に講義いただきました。その内容の一部を紹介します。



★ 不登校支援のキーワード

不登校支援におけるキーワードは、「安心感の確立」「表現」「絆の形成」です。つらい立場にいる子どもたちの多くは、自分のつらいことをなかなか話そうとはしません。言えるだけの心のエネルギーが乏しいからです。では、先生からどのようなメッセージを受け取ると心のエネルギーが高まるのでしょうか。それは、「先生は、私のことを分かってくれている」「先生は、私のことを気にしてくれている」「困ったときに助けてくれる」「私のいいところを認めてくれている」等のメッセージであり、そこには信頼できる先生の存在があります。つまり、自分は愛され、認められていると実感し確信を得ることによって、安心感につながるのです。これは不登校の子どもたちだけでなく、すべての子どもたちが求めている気持ちであると言っていいでしょう。

元気のいい子どもの心の器の中には、なみなみと「成長（への）エネルギー」が注がれています。そして、生き生きとした表情をみせています。「成長エネルギー」に満ちあふれ、心が生き生きとしている状態は、体も生き生きとしています。心と体は一体のものですが、不登校状態にある子は、様々なストレスから、「成長エネルギー」が抑圧されている状態になります。このつらさが、腹痛・頭痛などの身体症状に出るのであります。この段階は不登校の初期段階として表れ、「身体的愁訴の段階」と呼びます。（後述）

これらのつらいストレスを、誰かに表明・表現できるといいのですが、それを邪魔するものがあります。それが「心の扉」です。思春期になると特に「重い心の扉」となり、ますます引きこもりが加速します。特に、思春期の子どもの心の扉を開けるのは至難の業となってきます。不登校の子どもだけではなく、ストレスを抱え何かにつまずいて悩んでいるすべての子どもの心の扉を開けることができるマスターキーはないのでしょうか。



私は、「相手を尊重する “Be respectful”」態度で関わることが、マスターにすると、不登校臨床の経験から確信しています。その際、“Be respectful”と同じ意味をもつ言葉として、「ねぎらい」「いたわり」いう日本語をあえて使って考えると対応のきっかけが生まれます。これらの用語は、いずれも「労」という漢字が当てられています。頑張っていることや苦戦していることを心から労い（ねぎらい）、労り（いたわり）の態度で関わってもらうと、「私は見捨てられない。愛されている、認められている」という実感が生まれ、自然と「心の扉」が開いていくことが分かったのです。

心の扉を開け、お互いに向き合うきっかけをつくるマスターを持つているのは、つらい状況にある子ども側ではありません。自分のことを親身に関わってくれる大人側（親、教師など）なの

です。また、子どもたちは、まわりの友人たちからもあたたかい眼差しと言葉がけを求めているのです。不登校を克服した子どもたちに「願い」や「思い」を聞くと、「とにかく自分の気持ちを分かってもらいたかった」「少なくとも分かろうとする努力をしてほしかった」「分かってもらえた時に安心でき、ほっとできた」「それを支えにがんばることができた」と語っている子どもたちに、これまで多く出会ってきました。

★ 不登校対応の 5 つのポイント

ポイント①：不登校問題は進路（生き方）問題、社会的自立の問題と捉える

→不登校は心の問題としてとらえられがちですが、今後どうしていきたいのか進路問題としてとらえ、本人の「願い」の実現にむかって、心理面のアプローチだけでなく、社会面、学習面、進路面、健康面からのチーム支援を行うことが必要です。特に、中学校期は、進路面へのサポートがポイントです。

ポイント②：学級集団の「ソーシャル・ボンド（社会的絆）」づくり

→不登校の予防的支援の視点から、思いやりのある良質なリレーションづくりを中心とした、予防的人間関係の開発的指導を学級で進めます。（人間関係を深めるワーク、悩みを聞き合う機会の導入）

ポイント③：子ども、保護者の願いや戸惑いを受け止め、がんばりを支えること

→不登校生は、「困った子」ではなく、何かに「困っている子」であると考え、何かこの子に得意なことはないか探索します。否定的な行動には過剰に注目をしない、子どもの言動に巻き込まれないなど、専門性をもって対応します。不登校生をもつ親の苦労は並大抵ではなく、その保護者の苦労や大変さに耳を傾け、「労い、労る」尊重的態度をもって対応を貫き通すこと。これが保護者のエネルギーを高め、わが子に対して粘り強く接していく原動力となっていくと言っても過言ではありません。



ポイント④：不登校になることは悪ではないと考えること

→真剣に自分の歩むべき道を模索している貴重な時期ととらえて関わります。その時点で学校へいくことに心を痛める子どもにとっては、自分の身を守る安全弁の役割も果たしていると考え、対応策を検討していく姿勢が必要です。



ポイント⑤：Trial & Error

→不登校の子どもの回復の過程とその対応は個人差があります。従って対応は、その子との関わりがうまくいっている場合は、その関わり方を継続し、うまくいっていない場合は、その関わり方の問題点を検討し、別の方で試行し進めます。

不登校支援には、子どもから信頼される先生の存在が不可欠です。これら 5 つのポイントを踏まえ、常に子どもたちに “Be respectful” の気持ちで接しながら、子どもたちを元気にしていく支援が求められています。

まずは、おとなが落ち着いて

8月22日（土）、23日（日）の2日間、不登校の子どもを持つ親とOBによる「親の会」を当所で実施しました。

「ウイズコロナと子どもたち-No Rain, No Rainbow-」と題し、佐藤眞子所長（まこさん）が講話を行いました。

保護者向けの話ではありますが、先生方にも通じる部分があると考えますので、その一部を紹介します。



子どものストレスとストレス反応

コロナ禍にあり、学校の臨時休校要請を受けて、但馬やまびこの郷を利用している子どもたちからは、3月くらいまでの間は長い春休みになったと喜ぶ声が聞かれました。しかし、休校が長期化するにつれ、その後、「不安」「怖い」という声が聞かれるようになりました。

子どもたちは気持ちをうまく言語化できないことがあるので、自分は元気だとか、学校は楽しいと言っている子が、実はそうでもないということがけっこあるものなのです。

また、子どもたちは、親の顔色を見るので、知らず知らずのうちに親の意向に合わせてしまうことが多く、その結果として頭が痛いとかおなかが痛いとかいう症状でストレスが身体化されたり、食べない・食べ過ぎる、落ち着きがなくなる、きょうだいにあたるなど行動面の変化となったりして現れることが多いのです。

余裕を持って子どもに寄り添うために

子どもに異変を感じたとき、例えば子どもがイライラしたり、不安を示したりしていたら、まずはおとなが落ち着くことです。次に子どもも落ち着きたいはずであることを理解するのです。何かおかしいな、何かあるなと気づくことが大切です。

子どもの言葉→まず気持ちを受け止める（「そうなんだ」「そうだろうね」）→言葉にする（「～が嫌なんだね」「～がしたいんだね」）→気持ちを受け止める（「～ていう気持ちなのかな」）→方法を伝える（「どうしたらいいか一緒に考えてみようか」）→相互に落ち着いていく

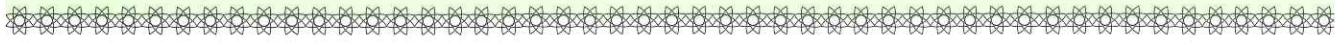
「どうしたらいいのかな」と一緒に考えられるおとなであります。

おとなもストレスを感じつつ生活しているので、自身のセルフケアが大切であると最近よく言われます。おとなが楽しめることを見つける、自分の気持ちにも関心を寄せることが大切です。



上記は、保護者に向けられたメッセージですが、同じおとなとして先生方にも通じるものがあると考えます。子どもたちの心に寄り添い、じっくりと話を聞くことが大切ですが、子どもの異変に気づくためには、日々子どもと向き合う先生方の心と体が元気であることが基本です。

当所も、同じく子どもたちの心に寄り添う支援を心がけ、心の居場所であり続けたいと思っています。チーム学校の一員として、当所でできることを分担し、学校、保護者と連携して子どもたちの支援に当たっていきます。



兵庫県立但馬やまびこの郷機関誌「虹のかけ橋」No.44 ●令和2年9月

●発行／兵庫県立但馬やまびこの郷

●〒 669-5135 兵庫県朝来市山東町森字向山45-101 TEL(079)676-4724 FAX(079)676-4721

●URL <http://www.t-yamabiko.asago.hyogo.jp/>

リサイクル適性 A

この印刷物は、印刷用の紙へ
リサイクルできます。

02 教① 2-001A4